

村山七郎先生のご逝去を悼む

小 泉 保

新緑の薫風香る季節となりましたが、このときにわかに村山七郎先生ご逝去の報に接し、驚愕してご霊前に馳せ参じました。

昭和48年上智大学における第68回言語学会大会での日本語の起源に関するシンポジウムはまことに盛会でありました。そのとき、村山先生が日本語とウラル語の類縁性についての重要文献として、ハンガリーの学者 W. Pröhle の *Studien zur Vergleichung des Japanischen mit den uralischen und altaischen Sprachen* という書名を挙げられました。ウラル語を専攻する私は、先生の博学なのに敬服致しました。それから、折に触れ先生とお話する場をもつようになりました。

先生は第2次大戦の末期に近い1942年から1945年にかけて、ベルリン大学においてアルタイ学の権威者 N. Poppe 教授の下で勉学されました。ご帰国後は、順天堂大学、九州大学、京都産業大学で教鞭をとられましたが、ドイツ語、ロシア語、モンゴル語、トルコ語にご堪能で、「話す、聞く」というプラクティカルな面を重視されました。

先生は戦後における日本語系統論の研究において太い道筋をつけられました。先生は、日本語が南方系要素の上に北方系が重なって出来上がったという仮説に立ち、これを論証するために数多くの本をお書きになりました。先生は常日頃から「フランスの比較言語学者メイエの弟子である」と自認され、ひとつひとつの語彙に関する比較分析の手法はまことに厳密でありました。最近琉球語からアイヌ語まで幅広い研究をてがけられ、念入りな考証を続けられてきました。

また、ロシアへの日本漂流民の言語に着目され、この面での解明に大きく貢献されました。過日「小泉さん、私はとうとう国賊になったよ」と話されたので、驚いてその理由を伺うと、幕末日本とロシアの間で結ばれた千島の帰属に関わる条約についてロシア文を検討したところ、ロシア側に有利であったので、その旨

報告されたとのことでした。先生は国益よりも真実を直視される、まっとう誠実な方だと深い感銘を受けました。学術研究者はどこまでも真実の追究に徹するべきであります。

この意味からも、先生はわれわれ言語の研究者にとって模範とすべき大学者であります。この正月にはアイヌ語の語源に関する抜き刷りをいただき、お元気でたゆみなく研究を継続されているものと信じておりましたが、にわかに天国に召されてしまいました。しかし、先生の日本語、琉球語、アイヌ語についての最後のご著書がご葬儀の当日5月15日に発行されました。病床でこの本を手にとってご覧になれたのは幸いでしたが、まことに奇縁であります。学者として見事な人生の結末と思います。

ここに先生のご業績を讃え、ご遺徳を偲んでお別れのことばと致します。どうぞ、天国においてやすらかにお休みください。

(以上は平成7年5月15日に行われた故村山七郎先生のご葬儀で小泉保氏が奉読した弔辞を同氏ならびにご遺族のご諒解をえてここに掲載させていただいたものである。)